

今月の谷口雅春先生のお言葉

家庭の中で子供の善さを引き出すには

家庭の中を明るくするには

きれいな心の人はまるで太陽の光や青空を運んでくるような人です。その人の行く所^ゆに何となくあたたかみがさしてくるものなのです。取越^{とりこ}苦労^{くわう}や心配は光の射すようなそんな明るい気持の人の近くへ来ると、自然に和やかになって消えてしまうのです。吾々^{われわれ}は人に深切^{しんせつ}であっても、にこにこ笑う喜びの心をなくして、深切をするのでは、一方では人に深切にしなから、自分の暗い顔つきで、人を気持悪くしているのですからその深切が何にも

なりません。吾々は明るく生活しなければなりません。

明るい生活の中にはすべての善いものが集^{あつ}まってくるのです。昔から「笑う門^{かど}には福^{きた}来る」という諺^{ことわざ}があります。すが、にこにこ笑っていると、自然に善いことが集^{あつ}まってくるのです。人をたのしく愉快^{ゆかい}にしてあげることが美しい行い^{おこな}であり善いことでもあります。その楽しく愉快にしてあげるには、色々の贈物をさしあげるのも、一つの方法でありますけれども、物をさしあげなくとも吾々^{われわれ}がにこにこたのしい顔つきをして、たのしい心を他の人に移してやればそれが最も深切な、人に幸福を与える方法であります。

(新装新版『生活読本』155～156頁)

家庭にはあなたの明るい顔が必要なのです

うれしい顔をするには何の資本もいりません。深切な目附きをするにも何の資本もいらぬのです。吾々は、この人をよろこばしてあげたいとただ思うだけで深切な顔になれたり、愉快な微笑を顔に浮べたりできるのです。あなたの愉快な顔つきは曇った日にさしこんで来た太陽の光のようなものです。周囲の人が苦虫をかみつぶしたような顔をしていればいるほど、あなたの明るい顔が必要なのです。どんな富や財産をもっているよりも明るい心をもっているものは、もっとも尊い宝をもっているものだといわなければなりません。

(新装新版『生活読本』165頁)

子供を良い言葉でほめましよう

皆さんは今日から、空から花びらが降るように、いつ

も善き言葉を雨降らそうではありませんか。皆さんの口から常に花びらのような良い言葉が出るようになったら、どんな狭い裏長屋におりましても、そこがこの世の極楽となり天国となるのであります。たいてい会社や、工場商店などの勤め先で面白くないと言う人は、やはり家庭がどうも面白くない。家庭が面白くないのでそれで勤め先へ行ってもやはり能率がはつきり上らないで、そのために勤め先で又ぶつぶつやっている。その結果、昇給もしないという事になります。事業の発達しないのも、元はと言うと、皆家庭が悪いのであります。家庭の中で讚め合わず、暗い心持で、責め合っている時には、事業は失敗し、工場や鉱山では故障が起り、子供の健康も成績も悪くなります。

(中略)褒める言葉ぐらい結構な事はないのであります。

ところがなかなか家族同士が褒め合えないものであります。というのは、それは現象に執られて、目前の姿に執られて、人間の實相を見失ってしまい、人間が神の子である、ここが現実の浄土であるということを忘れてし

まっつて、ちよつと何か外に現れた失敗があると、それに執られてしまつて、一分間あつた失敗を一時間ぐらい嘸鳴りつける。その上、そのことをいつまでも心に持統けるといふような事をしていふような人たちの集つてゐる家庭は、いつも面白くないのであります。

（光明思想社版『人生読本』178〜180頁）

「神の子」が集まつてゐるのが

あなたの家庭です

息子や娘を善くしてやりたい愛の心だといつて、始終大きな声で口穢く罵ることは失敗である。それはたゞい愛の心があつても、鬼の面を被つた愛の心である。鬼の面を被つてゐる以上は、愛でも相手を恐れさすほかに能力がないのである。汝の鬼の面をとれよ。そして本物の愛の顔を出させよ。相手は懐いて、愛に感じて、喜んで善に遷つてくれるのである。

たえず小言を言い、絶えず怒りを振り撒いて歩き、間

断なく人の欠点をさがしつゝ、その人を善き人にしてやろうと思ふのは、「不調和」から「調和」が生れ出て来るだろうと予想すると同様な迷信である。たゞい、この世の中に瓢箪から駒が生れ出ようとも、「不調和」から「調和」が生れて来ることは難しいのである。諸君がもし諸君の立ち対う人たちをば善ならしめようと欲するならば、自分自身が先ず調和した心持にならなければならぬのである。自分の心が乱れ、癩癩に觸つて相手を鋭い言葉で刺し貫いてゐるようなことで、相手を善に化し得るなどと偉そうなことを考えぬが好いのである。（中略）

すべてあなたの家庭にてつかわれる言葉をば「神の子」らしい洗練されたものたらしめよ。互を尊べ。何故なら、あなたは皆な「神の子」であり、「神の子」の生活を成就するために家庭を造つていられるのであるからである。

（新編『生命の實相』第13巻168〜171頁）